

愛せないのに

エルヴェ・バザン
二宮敬・山本顕一訳

新しい世界の文学

白水社

新しい世界の文学
愛せないのに 7

定価 六五〇円

訳者略歴

二宮 敬

一九二八年生

一九五三年東大仏文科卒

フランス・ルネッサンス文学専攻

東大文学部助教授

訳書 バイエ「自由思想の歴史」

山本 顕一

一九三五年生

一九五九年東大仏文科卒

成城大学講師
訳書 サント・ブーヴ「人生論」

訳者

◎

二宮 敬
（にのみや けい）

発行者

草野 貞之
（くさの けん）

印刷者

山田 博
（やまだ ひろ）

発行所

株式会社 白水社
（しづく しゃ）

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京（291）七八一（代）

振替東京 三三二二八

郵便番号一〇一

三陽社印刷・大光堂製本

愛せないのに

Hervé BAZIN

Qui j'ose aimer

© Editions Grasset 1956

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

愛せないのに

エルヴェ・バザン
二宮敬・山本顕一訳

白水社

新しい世界の文学

ジ
エ
ラ
ー
ル
・
ボ
ー
エ
ル
に

ベルトの目にはなにひとつはいってはいなかった。もちろんそうだ。それに、あの子はもともと近視だし。川岸から一メートルほど離れたところに用心深く足をふんばり、両手をお腹に当ててこすり合わせながら、あの子は首をゆすり目を細めて、せいっぱいおもしろがっているふりをしていた。そして例によって、

「ほんと？ イザ、ほんと？」

とつぶやくのだ。ほんととも嘘もあったものではない。わたしの目は節穴ではないから、ちゃんと二匹見える。その、エルドル川の底にしかけた筈築の格子網の中に。一匹は細長いやつで、筈築の首の針が並んだところに鼻先をくつつけて、じっと流れに身をまかせているし、もう一匹の丸っこいのは金褐色の鱗をきらめかせながら無我夢中でやたらにぐるぐる回っている。よあかしおじさんとふなおばさんだ。ふなおばさんはけっこう大きいから、よあかしおじさんに取って食われそうにも見えないが、こんなふうに同居するのはこわくてたまらないらしい。いっぽうこの筈築にもわたしは確かに見覚えがあった。大きさといい、格子網の目のぐあいといい、こんな筈築を持っているのはテノールさんだけだ。あのひとは休暇中は毎朝十時ごろになると例の緑色のぼろ舟をえいこらえいこら漕ぎまわるから、もしこの獲物を失敬するつもりなら急いだほうがよいわけだった。

「寒い？ イザ、寒いからね！」

ベルトはわたしにブルオーバーの襟へ手をやるのを見てこう言った。

たしかに暖かくはなかった。サルビアはまだ咲いていたし、あしの間に黄色く燃えたっているいち
はつも、まだほとんど赤ちゃけてはいない。あし、原をさか撫でする風にもかすかにゆれるだけだった
が、空はひと月も早く変わっていた。木の葉も鳥影もまばらな早過ぎる秋空は、その灰色の底に太陽
を隠してしまったのだ。この水は冷たすぎる。流れるでもなく、澱むでもなく、泥の臭いはもうただ
よってはいないが、まだ少しねっとりとしたうねりを見せながら、金色の水輪を静かに岸辺に押し
やっている！ とびこむには冷たすぎる。でもほかにやりようがあるかしら？ わたしは鉤竿を持っ
ていないし、だいいち笠簾は遠すぎた。なにはともあれ、あの憎らしいテノールさんの鼻をあかして、
おまけにじやがいも料理ばかりになりがちなナタリーの献立を豊かにしてやるチャンスを、みすみす
のがすってほうはない……よし、やろう！ ブルオーバーがわたしの腕からはぎ取られ、スカートが
すべり落ち、次にスリップ、すぐ続いてブラジャーがほりり出された——といってもこれはたいして
ブラジャーの役目をはたしていたわけではないが——なにしろママンには小さくなったのでわたしが
お古をもらったものの、わたしには大きすぎたのだから。わたしは乳房を手のひらでおおい、がたが
たふるえながら、真白なパンティーを脱ぐ前にちょっとためらった。でもこれをはいたまま水にとび
こむと、めんどろなことになる。昼食までに乾かないだろうから。結局のところわたしたちのうしろ
にあるものといえ、垣をめぐらした庭だけだし、目の前の流れと島ともうひとつの流れの向こうに
は、沼地のほかになにひとつなく、その先はラ・グロケーの広々とした低い草原になっていて、見渡

すかぎり羊飼いはおるか牛一頭、犬一匹いないのだ。

「でも髪の毛が！ 髪の毛がためよ！」

わたしの背中で妹が叫んだ。

しようがない！ パンティーも脱ぎ終えた。わたしはくるぶしをこすり合わせて靴を脱ぐと、勢いよく岸を蹴^けって川にとびこんだ。泡が隠^{かく}してくれるから、はだかでも平気。でも不埒^{ふち}な水面は、四肢の別れ目に秘^{ひそ}やかな翳^{かげ}りを見せている鈍いばら色のわたしの裸身を、一瞬映し出したのだった。

水はまずまずがまんのできる冷たさだった。ふるえあがるほどではない。わたしはとびこんだ勢いのつて、かえるが逃げるときにやるように両足をばたつかせながらどんどんもぐっていった。しかしそこは、くわいだのばいかもだのが生^うい茂^もっていてあぶない場所だった。すいれんのぬらぬらした茎がわたしの首に巻きつく。わたしはそれを歯で食いきった。すると今度は川底の藻^もがお腹^{なか}をまったく思いもよらない感じでくすぐったので、わたしはびくりしてこいみたいに寝がえりをうった。錘^{きり}のききすぎた笠^{うさやな}簪^{かんざし}にやっと手が届いたときには、息が続かなくなっていた。わたしはほんの数センチそれを動かしただけで、もうがまんできなくなり、たちまち川床を蹴^けって水面へ戻った。

わたしは頭を出して鼻で息をしながら、いやな臭^{にお}いのする水をべっぺと吐いた。こうやって下から見ると川岸は高く見え、そこからだを堅くして立っているベルトは、台座にのかった不安の彫像^{かっとう}といった格好^{かっこう}だった。この足りない娘ときたら、睫毛^{まつげ}ひとつ動かさないうんだから！ あの子はただ、男を呼び戻そうとする淫^{いん}売^{ばい}のような忠実さで、

「おいでよ！ おいでったらー！」

と呼びかけるだけなのだ。おまけに、

「雨だからさ！」

と言ひ足す。あんまり滑稽で、いかにもおぼかさならしい理屈なのでわたしは吹き出してしまった。もっともたしかにそのとおり、ばらばらと雨が降ってはいいた。エルドルの川面には小さな輪がちりばめられていた。幼いころ、わたしはこういう水輪を《雨の子たち》と呼んで、《お日さまの子たち》、つまり六月の真昼のさんさんたる太陽が木陰にふりまく幾千とも知れぬ光の輪と対照させたものだった。

わたしがもう一度潜ろうとしたとき、ベルトはいきなり身ぶるいして、くるりとうしろをふり向いた。ねずみのような叫び声を立ててとびあがったと思うと、彼女はスカートを押えて逃げ出し、果樹の生け垣のむこうに姿を消してしまった！ だからわたしは、スカートの足がからまるほど大またに歩いてくるナタリーの姿を認めたのだけれど、少しも驚きはしなかった。ナタリーは白髪の大まげにのせた白い円筒形の帽子をくしゃくしゃにしないように、大きな雨傘を高々と、ほとんど腕をのばしきるようにしてかざしながら、糊のきいたそのかぶりものと同じくらい、憤慨でしゃちほこばった様子でやってきた。十秒ぐらいで彼女は川岸まできてしまった。彼女が陶器のような目をむいて、厚ぼったい爪のはえた太い人さし指でわたしの下着の山を指さすのが見え、水面すれすれに出ていたわたしの耳に、すごいけんまくでとなり始める声が聞こえてきた。

「ヨゼフ！　こんな天気には、からだの調子もおかしくなろうってときに、水にとびこむなんて……ヨゼフ！　かあさんが見たらまあ……」

その先は、わたしが彼女から逃げた二メートルの水の深みまでは届かなかった。そしてわたしが岸に近い背が立つところまで笠簀を押しやってから、ふたたび水面に顔を出して見ると、ナタリーはわたしのおぼつかない河童^{かっぱ}ぶりを知っているだけに、不安でたまらぬといった様子で、ふたつにかがみこんで口もきけずにいた。でも、わたしの鼻が半分出るか出ないうちに、彼女はまたもやどなりはじめた。

「おまけに素^すっぱだか。ああヨゼフ！素^すっぱだか！はすかしくないの、十八にもなって……」
ついでに言っておこう。《ヨゼフ》という名は、ナタリーの場合、漠然^{ぼくぜん}とした間投詞で、ママンはこれが修道女の経営する小学校の帳面にJ・M・Jと略してしるされていた模範的な聖家族《イエズス・マリア・ヨゼフ》の名残りだと見ていた。わたしとしては、むしろこの言葉に、ずっと前にナタリーの夫だったひとの思い出をかきつけていた。夫とはいっても、きつとともいやなやつなので、五十年もたった今でも、その名前がひとを咎^{とが}める叫びのように聞こえるのだらうと。いずれにせよナタリーの《ヨゼフ！》は、かならずしくでもないことが起こるしるしで、間髪いれずにだめてやる必要があった。この訓練に馴^なれているわたしは、すばやく笠簀^{うしやな}の蓋^{ふた}をはずし、縋^{えら}を押えてふなをつかまえると、ぼんとほうりあげた。ふなが金色の弧をえがいてナタリーの足の真下^{ました}に落ちると、彼女は毒舌をぴたりとやめて、好奇心を隠しきれない様子でつぶやいた。

「ふな！泥^{どろ}くさいよ……」

しかしそこによあかしが追加されると彼女はすっかり機嫌^{きげん}をなおした。
「ヒューッ！」と口笛を吹き、「たっぷり一キロはあるね。」

そして欲深そうな目を神妙につぶって見せると、あわててささやいた。

「とにかく、筈築を元のとこに返して置かなくちゃ。」

*

筈築はとくに元どおりになっていた。そしてわたしはさっさと岸に上がり、足には靴、腰にはパンティーをつけた。その間ナタリーは片手で傘をさしたまま、左手で前掛けをつかんでわたしの背中をふいて、急いでいるわたしのじゃまをするのだった。彼女は節を曲げまいとして、ひたすら体面を重んじる気持ちからなおもぶつぶつ言っていたが、肩をそびやかすのも上の空で大事な魚を注意深く見張っていた。よあかしはかすかに口をあけただけで、他者の死によって十分に生きてきた肉食獣が従容とおのれの死を受け入れるさまにも似た威厳を保ちながら、静かに死んでいた。ところがふなは尻尾をじたばたさせ、草に鱗をこすりつけていた。ナタリーは慎重に、それを踵でふまえた。それからわたしの背中にかまうのを中止して、身をかがめふなを拾いあげると、前掛けの大きなポケットに押しこんだ。まるでふくろねずみみたいに彼女のお腹のところにくっついたこのポケットには、いつも紐のはしきれ、薄紙、『西部フランス新聞』の料理欄の切り抜き、草花の種子、こまごました台所道具などがごたまぜにはいつてふくらんでいるのだった。

「早く、早く」と彼女はいきなり言った。「だれかがあそこで泥を煮りたくっているから。」

《泥を煮りたくる》(は「煮りたくる」の意)とは《泥の中を歩く》の意味で、たぶん料理の《煮る》という言葉とくっつけてしまったのだろうが、ナタリー独得の表現のひとつだった。柳の枝ごしにちらと見

たところでは、わたしにはそれらしいものはなにも認められなかった。ざわめきはむしろいぐさの茂みをばんが歩きまわっているように聞こえた。それでもわたしは顔が真赤になった。下着、スリッパ、スカートをばく、ブルオーバーをかぶる、四つの動作、四秒でなにもかも元どおりになった。ナタリーもよあかしを拾いあげてから家のほうへ坂を上がっていった。わたしはななかまどの木のところで彼女に追いついた。この木はわたしたちの霊木で、小さいときから背の高さや洪水の水位を刻みつけてきたので、根もとに近いあたりの樹皮は半分はがれたようになっていた。ナタリーは心臓にこたえる最後の急斜面を登る準備にひと息いれながら、わたしを傘の下に引き寄せ、ななかまどの木をじっと見て、

「あんたも大きくなっただね」

とぼつんと言った。

それから、話がとぶのにはおかまいなしに、

「あんたたちにバタークリームを作ってあげたいと思うんだけど、ほんとにまあ！ この辺のバターときたら、まるきりマーガリンみたいでさ……」

彼女はここで口をつぐみ、耳をすました。あのボタンという音、あれはぐり戸だ。マドロンメロディー——お酒飲みの歌——あの口笛は郵便屋、自転車にまたがって吹いているのだ。するとまもなく、桃、なしと続く枝の茂みの向こうを、ベルトのベージュ色のドレスが過ぎてゆくのが見えた。よたよたと、太りすぎのかもしれない。あの子はわたしたちがどこにいるのか、もう忘れてしまいい、めくらめっぽうに捜しながらびいびいわめいている。

「ママンから手紙がきた！ ママンから手紙がきた！ ママンから……」

やっと彼女はナタリーのかぶりものを見つけて、こっちに急カーブしてきた。

「ママンからの手紙よ！ ナ・タ・リー・メ・リア・デク・さ・ま・へ。」

彼女は字が読めるのを得意になって、何度もうくりかえした。

「お見せ！」

あて名の人物はそっけなく言つて、霧雨のために青いしみがぼつぼつ散った封筒をひったくり、た
いせつな雨傘を必要な高さにかかげたまま、巧みに封を切った。

手紙を離して見たり近づけて見たり、また離して見たり、そうして眼鏡なしで老眼にちようどよい
距離がきまると、判読がはじまり、唇が声なく動いてそれを手伝った。と見るまにたちまちナタリー
の眉がひそめられた。この三週間というものの、ママンがわたしたちから離れて休暇を楽しんでいる
ラ・ベルヌリから《親展》の手紙が着くたびに、きまってナタリーは眉をひそめるのだった。きょう
のたよりはいちだんと重大なものにちがいないわ。きっと、何か月も前からわたしたちみんなが言わ
ず語らずのうちに恐れていた大詰めを知らせてきたのだ。雨傘がナタリーの手をすべり落ちはじめ
た。彼女が軽く頭をよじって二枚目を読みはじめるころには、傘はますます落ちた。三枚目まで
きたときは完全に落ちきって、まるできのこの笠みたいにな彼女のかぶりものの上にのっかってしまっ
た。

「めっそうもないこった！」

とナタリーはつぶやいた。

そして突然、傘を頭からのけて桶のように前へ突き出しながら、彼女は急斜面を乗りこえ、にわか雨が瓦やつたを色あざやかに洗っている家へむかつて、カーネーションの植え込みの道を突進していった。彼女は戸口で靴の泥を落とそうとさえしなかった。なにかが彼女の喉の奥で、まるで桶がごぼごぼいうような音を立てている。そのなにかは、彼女が台所の神聖な床に泥靴を引きずりながら雨傘をたたみ、ポケットから出した魚を流しにほうり出したときに、やっと言葉になった。

「あんたたちに言わずにはすまないことだね！ かあさんは明後日お帰りだよ。そして、あることを決心したと、書いてよこしたんだよ。というところをみると、どうやら……」

彼女の目はとび出さんばかりにひんむかれていたが、かんじんのニュースはどうしても口から出てこない。彼女はなんのためだか、掛け時計を見やった。それから、《へえ！》とか《ふーん！》とか言いながら、薄笑いの中に埋没しているベルトをながめた。ナタリーはとりわけわたしを共犯にも近い執拗さでじっと見つめ、唾をのみこんで、

「つまりさ！ 再婚するってことよ」

と投げつけるように言った。

「再婚だって？」

とベルトは信じられない様子ではか正直にたずねた。

「かあさんは離婚してるんだから、再婚できるのさ」とナタリーはどなった。「残念ながらできるのよ！ 神さまはお禁じになっていられるけれど、法律は許してるからね。けっこうな法律だよ！……」
ナタリーはぐいというしろむきになると火掻き棒をわしづかみにして、料理かまどの焚き口の三つの